

● 論旨まとめ・感想

第三部 第十三章(p.189～)にコンパクトにまとめられている。

わたしたちの生活で自明なものとしている「客観的で普遍的な」時間が、現代物理学の知見によってくつがえされる。とくに、現代のわたしたちの時間は、すでに標準化を経た時間である(p.64)。それは人々の生活を組織するうえで決定的な役割を果たす(p.63)。しかし、著者は、このような時間は、ニュートン(1642-1727)に端を発する時間であり、現代物理学によれば、時間は単一でなく、過去と未来の違いも消えてしまう(p.39)。

「時間の流れを特徴づけるすべての現象は、わたしたちの視野の曖昧さ」に由来するものでしかない(p.40)。とはいえ、本書は、このように『時間は存在しない』としながらも、これまで自分たちが思っていたようなものではない時間、しかし、わたしたちが慣れ親しんだ、「わたしたちにとっての」時間ありようを教えてくれている。

【1】なぜ「客観的で普遍的な」時間が常識となったのだろうか?(p.70～)

前回の、カトリーヌ・マルサル(1983-)『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か』で、『生産の3要素「土地・労働・資本」』について、「囲い込み(enclosure)から賃金労働者化」について指摘があったが、時間の標準化と、資本主義の伸張は、多分に連関しているのではないか(テラー・システム?)。

十九世紀になって電信が登場し、列車が普及して速度も増すと、異なる都市の時計を正確に同期させる必要が出てきた。(略)最初に時間を標準化しようとしたのは、アメリカ合衆国だった。(p.64)

タイムカードをスタンプして、均質な時間のものに賃金や利益を数値化し、効率化を目指すような時間(経済人の時間)ではなく、わたしたち自身の時間へと立ち戻るヒントとして本書を読んでみてはどうか。

【2】わたしたち自身の時間を立ち戻るヒントとしての『「出来事」としての世界』、著者は「この世界は物ではなく、出来事の集まり」なのだという。

「時間」と呼ばれる単一の量は砕け散り、たくさんの時間で編まれた織物になる。したがって、時間のなかで世界がどう展開するかは記述しない。局地的な時間のなかで物事がどう展開するか、さらには局地的な時間同士が互いに対してどう展開するかを記述する。この世界は、ただ一人の指揮官が刻むリズムに従って前進する小隊ではなく、互いに影響を及ぼし合う出来事のネットワークなのだ。(p.23) [参考①、②]

実際さらに細かく見ていくと、いかにも「物」らしい対象でも、長く続く「出来事」でしかない。もっとも硬い石は、化学や物理学や鉱物学や地理学や心理学の知見によると、実は量子場の複雑な振動であり、複数の力の一瞬の相互作用であり、崩れて再び砂に戻るまでのごく短い時間に限って形と平衡を保つことができる過程であり、(中略)そしてそれは、わたしたちが知覚している対象より、むしろ知覚しているこちら側の身体構造に依拠したこの世界の細分化の一部であり、現実を構成する宇宙規模の鏡のゲームの複雑な結び目なのである。(p.99)

そして、人間もまたネットワークの一つの結び目だとする。遠藤周作(1923-1996)の『深い川』から[転生]を抜き出して、「結節点としての私」という議論を経てきたことをふまえると、次のエピソードは、たんにロ

マン主義としての[転生]ではなく、現代物理学者の知見が描き出す[転生]として、感動的だった。

ジョンとブライスは、わたしにとって心の父だった。喉がからからだったわたしは、二人のアイデアのなかに、新鮮な水、澄んだ新しい飲み水を見つけた。ありがとう、ジョン、ありがとう、ブライス。人間は、感情と考えを糧に生きている。同じ時間に同じ場所にいれば、言葉を交わし、互いの目を見て触れ合い、感情や考えを交換する。わたしたち自身が、このような遭遇や交流のネットワークなのである。しかし実際には、同じ時間に同じ場所にいなくても、このような交流は成り立つ。わたしたちを結びつける考えや感情は、薄い紙に固定されたり、コンピュータのマイクロチップの間を跳ね回ったりして、何の苦もなく海を越え、何十年、さらには何百年もの時を超える。わたしたちは、一生のうちの数日といった時間や、自分たちが歩き回る数平方メートルの空間をはるかに超えた広大なネットワークの一部であり、この本も、そのネットワークに織り込まれた一本の糸なのだ。(p.121)